

2024 推・帰・社

受 験
番 号

医学部保健学科

小論文 I ・ II 問題

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は9ページです。1から3ページが小論文I, 4から9ページが小論文IIの問題です。落丁, 乱丁, 印刷不鮮明の箇所等があった場合は申し出てください。
3. 問題冊子の余白は下書きに使用してもかまいません。
4. 解答は所定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰らないでください。
6. 問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

医学部保健学科

小論文 I 問題

次の英文を読んで、問1から問5に日本語で答えなさい。

The right to repair movement added another win recently as Minnesota Governor Tim Walz has signed a bill that will allow people in the US to repair their electronics through third parties. (1)The right to repair bill would require manufacturers of phones, computers, and home appliances to share written instructions and software needed to fix electronic devices, making it easier for consumers to go to third-party companies for repairs or repair items themselves. (2)Before, users would have to get repairs from the manufacturer of their electronic, that is, Apple would have to fix iPhones. Supporters say the new right to repair bill will extend the lifetime of personal devices.

The right to repair movement picked up significant momentum after President Joe Biden signed an executive order calling for federal regulators to apply existing laws to decrease “unfair anticompetitive restrictions on third-party repair or self-repair.” There has been push back from manufacturers, such as Apple and Microsoft, who feel that new legislation will have ‘unexpected results’ and that electronics may become unprotected to cyber attacks.

(3)The two main arguments against right to repair bills include, firstly, the idea that poor repairs and low quality parts, supplied by third party repair shops, could be considered unsafe and could be harmful for consumers. For example, broken phone chargers could cause fires. The second argument is that competitors might make knock-off products or steal IP if full schematics were made available. However the argument is not so important when you consider the ease of how third parties, or anyone, can find the broken part and then fixed, without the need for the manufacturer’s production files.

The US have an advantage over Europe in terms of legislation becoming law, where right to repair bills for smartphones won’t become effective for two years. The EU is in the process of introducing right to repair bills, with (4)a proposal indicating that sellers will be legally required to repair or replace products within two years of purchase for free if the product is defective. They have also recently proposed the European Green deal which makes it easier for people to repair their goods that have had their legal guarantee ended, in an effort to cut down on waste.

(Reynolds, S. EU begin to fall behind US in right to repair bill race, Business Plus, 4 June 2023 より一部改変して引用)

(注)	bill	法案
	electronics	電子部品
	third party	第三者
	appliance	器具
	momentum	勢い
	executive order	大統領行政命令
	federal regulator	連邦規制当局
	legislation	法律, 法律制定
	charger	充電器
	knock-off product	偽ブランド商品
	IP	知的財産権
	schematic	回路図
	legally	法的に
	defective	欠陥がある

問 1 下線部(1)の法案名を日本語に訳しなさい。

問 2 下線部(1)は消費者にどのような影響を与えるか, 答えなさい。

問 3 下線部(2)に関して, 以前は消費者がどのような状況だったか答えなさい。

問 4 下線部(3)に関して, 1つ目の論点を答えなさい。

問 5 下線部(4)は, 法的にどのようなことを販売者に求めているか答えなさい。

医学部保健学科

小論文Ⅱ問題

1 次の文章を読んで、問1, 2に答えなさい。

ワークショップはそれぞれの意見を整理統合する議論の場である。しかし、日本人は議論下手だというのはよく言われることだ。本当にそうだろうか。これについて、少し考えてみたい。

オーストラリアに留学していた頃の経験だが、電車やバスで自分の隣に座ってくる人は、「座ってもいい？」と、必ずひと声かけてくる。それだけではない。隣に座った人はほとんど例外なく、何かしら話しかけてくる。「どこから来たの?」「学生ですか?」「何を勉強しているの?」という調子だ。当初は、東洋人の僕がもの珍しいからなのかと思ったが、どうもそうではない。オーストラリアではごく普通に交わされているコミュニケーションである。これは、アメリカやヨーロッパでも大差ないだろう。

彼らは、パブリックな場で自分がどう振る舞うべきかを常に意識している。先に挙げたようなコミュニケーションは、その場の雰囲気をもくしよ、おもしろい会話を作り出そうという気持ちから生まれる努力である。周囲の人はそれがわかっているからこそ、同じ努力で応じる。だから見知らぬ者同士が集まる電車の中や公園でも、楽しい雰囲気が生まれる。

そういったことが習慣として定着している彼らが、(1)日本に来てワークショップに参加したりすると、ものすごく戸惑うのだそうだ。ファシリテーター^注が、「何か質問はありませんか?」と聞いても、誰も手を挙げない。ファシリテーターと目を合わせないように下を向いてしまう人もいる。その光景は衝撃的でさえあると、海外の友人から聞かされた。

日本人なら、ワークショップの会場に足を運んだ時点で「興味がある」という意思表示になると理解できる。しかし、海外ではその感覚は理解されないことが多い。興味を持って参加した以上、その場の雰囲気が盛り上がるように努力をするのは当たり前だからだ。「質問はありませんか?」と言われたときに、挙手をして発言の姿勢を見せることが、「この場が楽しくなることに私は協力します」という意思表示なのである。会場で誰ひとりとして手を挙げずに押し黙っているという、日本人なら見慣れた光景は、外国人の目には参加者全員があからさまに非協力的な態度を示しているように映る。

未来塾のワークショップでも、初日の午前中に行った講義の途中で、「ここまでで何か質問はありますか?」と聞いたとき、手を挙げた学生はひとりもいなかった。別に驚きもしなかったが(むしろ日本ではそれが普通だ)、もしも日本に来たばかりの留学生が参加していたとしたら、カルチャーショックを覚えただろう。

ただし、外国人に比べて消極的なところが日本人の議論下手の原因のすべてだとは考えない。問題視すべきは、消極的なことよりも否定的になることだ。

住民参加型のワークショップにおいて、否定的な意見が出ないことはまずないと言える。住民主体の話し合いで意見が二分しているときなどは、放っておけばディスカッションが罵^{のし}り合いに変わることもある。意見への批判ならともかく、「お前を見損なった」などと、ともすると主張が人格攻撃にも変わる。これが前向きな議論を阻んでしまう最大の要因である。

(山崎亮, NHK「東北発☆未来塾」制作班, まちの幸福論 : コミュニティデザインから考える, NHK 出版, 115-117, 2012.)

注) ファシリテーター : ディスカッションを促進する, 司会のような役割

問1 下線部(1)について, なぜ戸惑うのか, 海外との違いをふまえて解答欄

1

 - 1 に 100 字以内で説明しなさい。

問2 あなたはどのような態度でワークショップに参加したいと考えるか, 筆者の問題提起をふまえて, 解答欄

1

 - 2 に 200 字以内で述べなさい。

2 次の文章は作業療法士を対象に書かれていますが、あなたの志す専門職に置き換えて読み、問1, 2に答えなさい。

作業療法士たちの多くは、自らをプロフェッショナルだと意識しているに違いない。ではプロフェッショナルとは何だろうか。

(中略)

著名なビジネス・コンサルタントである大前研一¹⁾は、プロフェッショナルとスペシャリストは似て非なるものであるという。なぜなら、スペシャリストはある領域の専門知識、技術を備えた人のことであるが、プロフェッショナルはそれ以上のものであるからと。

そしてプロフェッショナルの語源である *profess* はそもそも、「神に誓いをたて、これを職とする」ことを意味するのだと言う。では、誰のために？ 現代のビジネスにあっては、それは顧客のためである。顧客主義こそが21世紀のビジネスの規律でなければならないというのが氏の主張である。

プロフェッショナルは職業の種類によって定義されるものではない¹⁾。揺るがないビジョンと永遠の探求心、そして自力本願と顧客主義（もしくは現場主義）をそなえた者こそが現代のプロフェッショナルであろう。

この中で、私がいま最も心を惹かれるのは顧客主義（もしくは現場主義）である。

「現場に出ろ、答はそこにある」と一流のプロたちは言う。これを作業療法にあてはめるとどうなるであろうか。

ひとつの流儀として、「どういう生活（作業）をしたいか、患者（顧客）に尋ねる」というのがある。これがよい場合もあるかもしれない。しかし一般論として言えば、私はこの流儀に疑問をもっている。

(中略)

建築家中野好文は、「どんな家が欲しいか、依頼者はわからない」と語っている。だから氏は、依頼者との雑談を重ね、その中から依頼者にとって心地よさそうな家を探っていくのだと言う。

私は、氏の発言に心の底から共感する。皆さんは、身体的苦痛があって医師を訪ね、そこでいきなり「注射をしますか」と問われて当惑したことはないだろうか。作業療法の顧客とて同じであろう。(1)プロフェッショナルに求められるのは“提案力”である。現存の資源の範囲内で顧客の願いにかなう提案を生み出す力こそがプロには求められるのだと思う。

(中略)

個人的体験であるが、現場の所見から対象者の作業実現を支援する方法の手がかりを得る、ということは私自身も経験している。

それは、それまで家事をこなしていた97歳の母親が、ある朝突然に作業不能に陥ったことによって始まった（軽い脳梗塞を起こしていたと後でわかった）。2ヵ月後、軽い鬱状態を脱した後に

問題となったのは、本人が「食後の茶碗洗いはするよ」と強く主張したことである。しかし何であれ素手で水洗いをするだけなので実用にはならなかった。

洗剤と手袋を使うように導きながら、米を研ぐ作業を頼みながら、ベランダで一緒に鉢の植え替え作業をしながら、私は母の行動をつぶさに観察した。その結果から私が得た結論は、母は「(告げられた) 多数情報を処理できない」、「(見えている) 多数選択肢の中から選べない」、「告げられた言葉からイメージを想起できないことがある」、「コレはわかるがソレはわからない」、しかし「手にした道具と材料は正しく順序良く扱う」ということである。

この推理を土台にして、私は茶碗洗いの支援作戦を考えた。流しに必要物品をすべて整えたいので母を呼び、まず手袋を手渡してはめるのを見届け、次に洗剤容器を手渡して彼女が洗剤液を桶に垂らすのを見届け、そのうえでスポンジを手渡して、「はい、お願いします」と言ってみた。作戦は成功し、母は次々と下洗いをを行い、すすぎ、^{かご}籠入れをこなし、滞ることはなかった。試しにこの導入作戦を省くと、母はたちまちにして混乱に陥った。

この小さな成功は、私に深い安堵をもたらした。一時は思案に暮れていた母との暮らしを、これからどう組み立てていけばよいかはわかったと思ったからである。

職業人としての私に立ち戻ってみると、私はこの経験からふたつのことを学んだと思う。ひとつは、月並みではあるが、究極の現場である生活の場がもたらす情報の豊かさである。しかしもうひとつのさらに重要な気づきは、現場が全てではない！ ということであった。私は、母の脳機能を推理するにあたって、無意識のうちに、これまでの学習と経験で培った認知神経心理学的視点を使っていた。この基盤がなかったら、眼前の所見は私の意識を素通りして行ったと思われる。現場は発想の機会に満ちているが、しかし現場に身を置きさえすればよい、というわけではない。

作業療法は固有のパラダイム^{注)}を持ち、場面と手順を整えたいうえで個々の患者やクライアント(顧客)にはたらきかけ、その人々の作業実現をはかろうとするものである。しかしその過程では、さまざまな他領域の知識技術を援用している。基礎医学、臨床医学、障害学、運動学、心理学、臨床心理学、認知神経心理学、作業技術等々は、作業療法士養成課程の中で必ず教えられている科目である。ある人々はこの状況を、作業療法の自立性を脅かすものと見る。

しかし、作業療法が多種類の学問を援用するわけは、「ひと」や「患者」を理解するのにそれが有用だという点にある。医学や心理学や運動学の知識をもつことはむしろ武器を増やすことであり、決して不名誉なことではない。

文献

- 1) 大前研一、ザ・プロフェッショナル：21世紀をいかに生き抜くか、ダイヤモンド社、2005.

注) パラダイム： 特定分野、その時代において規範となる「物の見方や捉え方」

(鎌倉矩子, プロフェッショナルの成長, 作業療法 25 巻, 401-405, 2006. より一部改変)

問 1 下線部(1)である理由を, 解答欄 -1 に 100 字以内で説明しなさい。

問 2 本文を読んで, あなたは将来どのようなプロフェッショナルになりたいと考えるのか, 解答欄 -2 に 300 字以内で述べなさい。